

2020年1月6日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 沼田 彩誉子
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 極東生まれタタール移民2世の帰属意識
—「テュルク・ムスリムの国トルコ」は唯一の「故郷」なのか—
論文題目（英文） Senses of Belonging in Second Generation Tatar Migrants Born in the Far East: Is 'Turkic Muslim Turkey' Their Only 'Home'?

公開審査会

実施年月日・時間 2019年12月11日・11:00-12:15
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第四会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	店田 廣文	博士（人間科学）	早稲田大学	社会学
副査	早稲田大学・教授	森本 豊富	Ph. D. (Education)	UCLA	移民研究
副査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士（文学）	早稲田大学	文化人類学・民俗学

論文審査委員会は、沼田彩誉子氏による博士学位論文「極東生まれタタール移民2世の帰属意識—「テュルク・ムスリムの国トルコ」は唯一の「故郷」なのか—」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

1.1 Q：調査協力者の母語は何か、第一言語によって故郷の語りに影響はあるのか。

A：本研究が対象とした極東生まれタタール移民2世の母語は、タタール語である。個人差はあるものの、ホスト社会の言語である日本語やトルコ語等を流暢に話す。各言語能力の保持の程度が、帰属意識と結びつく傾向にあると同時に、そのような実際の言語能力には関係なく、帰属意識を表明するために、インタビュー使用言語が選択される例も見受けられる。

1.2 Q：タタール移民には「難民」や「ディアスポラ」としての側面があるが、それらの用語が本文中にほとんど見受けられない。

A：タタール移民の移動の歴史は、①本国への帰還、②避難先への統合が叶わず、③第三国へ定住するという、難民の3つの「いわゆる恒久的解決」に一致するもの

であり、難民としての性格は無視できない。しかし、当事者が難民よりも移民として自己を認識していること、難民と定義しがたい側面が見受けられることから、難民も包括する移民という呼称を使用した。また、ディアスポラの語を冠する研究が氾濫し、定義が困難と判断したこと、移民が複数の「故郷」をもつ可能性を模索する本論文の目的に鑑み、「約束の地」を想定しがちな本用語からは距離を置くべきだと考えたことから、使用を避けた。

1.3 Q: 一般のタタール移民を扱っているが、戦中期日本の回教工作と無関係ではない。特にクルバンガリー派とイスハキー派の分裂について、協力者一覧の属性欄等に派閥を記すべきである。

A: 確かに回教工作との関係は深く、その観点からタタール移民を扱う多くの研究がなされてきた。しかし本研究の目的は、国策の実施対象ではなく、移民として彼らを捉え、より広範な時期、場所、経験を視野に入れることにある。一方で分裂という出来事は、彼らの経験を理解するうえで重要な一要素であり、語り手や家族の極東における立場が忘れ去られることはない。しかし、かつての派閥を超えた人間関係が構築されていること、オーラルヒストリーは信頼関係があってこそ実現可能であることから、属性として記載すべきではないと考える。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 タタール人の全体的な移住史が記述されるとよい。

2.1.2 インタビュー時の語り手の年齢を明記すべきである。

2.1.3 懐かしさを感じても、その場所の一員としての帰属意識を抱いているとは限らない。帰属意識、故郷、祖国など一連の用語について、トルコ語や英語など他言語で表された場合には、意味の広がりがあると考えられる。以上の点に関する記述があることが望ましい。

2.1.4 誤字脱字や形式上の修正が必要である。

2.2 修正要求の各項目について、修正が施され、要求を満たしていると判断された。

2.2.1 タタール人の移動の史的変遷を加筆した。

2.2.2 インタビュー時の年齢を付記した。

2.2.3 本論文では、Sense of Belongingの訳語として、帰属意識という表現を用いている。そのため、組織の一員として帰属するという日本語がもつ意味合いより、愛着や安らぎ、懐かしさといった感情を指すものであり、それらの対象となる場所を「故郷」と呼んでいる。この点を踏まえ、外国語の語りの訳し分けについて記述を加えた。なお、「故郷」はひとつに限定されないことから、タイトルではSensesと複数形にした。

2.2.4 誤字脱字や形式上の修正を行った。

3 本論文の評価

3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、回教工作中心の先行研究から脱

却し、タタール移民個々人の経験を今日の移民現象へと架橋するため、彼らが帰属意識を抱く場所、即ち「故郷」に着目している。具体的には、「移住理由とトルコ社会への社会的文化的適応に関わる個々人の語りを取り上げ、移動経験を振り返る際に一連の場所がどのように解釈、参照されているかを解明」し、「出身国から受入国という2ヶ国、2地域間にとどまらない移動を行う人びとの場所に対する帰属意識を考察する」ことを目指しており、従来とは異なる視座からタタール移民を捉えなおすための、明確で妥当な目的設定である。

- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文の根幹をなすのは、オーラルヒストリー法に基づいて実施されたインタビューである。申請者は2010年より日本、トルコ、米国等で調査を実施し、特に4年に渡るトルコ滞在は、同地に関わる十分なデータ収集を可能にした。その上で、桜井厚が発展させた方法論に基づき、語りを歴史的事実を解明するための証言としてではなく、「特定の歴史と交差する個人的経験の語り」と捉え、相互行為的文脈、社会的文脈に位置づけながら解釈、分析を行った[桜井厚2014「オーラルヒストリーの悩ましさ」]。以上の方法論は、移民個々人にとっての「故郷」を主題とする本論文の明確性、妥当性を担保すると評価できる。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：トルコは、極東生まれタタール移民2世にとって唯一の「故郷」ではない。むしろ「テュルク・ムスリムの国トルコへの移住」というモデル・ストーリーからは、移動を逸脱とみなし、戻るべきひとつの場所を移民に求める研究者や社会の態度と、出身地に戻ることができない1世による新たな「故郷」の創出が見える。極東各地の移民社会、生まれ育った場所、トルコ社会、先祖の地ヴォルガ・ウラル地域に対する帰属意識と、それらの有無、強弱、内容の多様性は、彼らが実際には、ひとつの国や地域に限定されない複数の「故郷」を保持し得ることを示している。以上が主要な成果であり、国策の対象という立場を超えた、今日のトランスナショナルな移民に共振する姿を適切に描き出している。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創性・新規性が認められる。
 - 3.4.1 戦中期に比重を置き、かつ回教工作に翻弄されたタタール移民の人々を集合的に扱ってきた既存の研究に対し、戦後から現代までの時期、複数の場所や多様な経験を射程に入れ、実体を持つ存在としての移民個々人を取り上げた。
 - 3.4.2 オーラルヒストリーという方法論を用いることで、文書史資料とは異なる発言を真偽の問題から否定せず、様々な文脈に位置づけながら、語り手の経験を解釈することが可能になった。
 - 3.4.3 モデル・ストーリーに収斂せず、複数の場所を「故郷」と認識する語りを通じて、帰属意識の多様性を明らかにし、複数の「故郷」の在り様を示した。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の通り、学術的・社会的意義がある。

- 3.5.1 2015年欧州難民危機を始め、アメリカの「ゼロ・トレランス」政策、イギリスのブレグジット、難民制度の行き詰まり等、移動する人々を巡る状況の改善は、国際社会が抱える喫緊の課題である。難民としての性格も有しつつ、複数の地域に関わる経験をもつタタール移民の「故郷」を解明することは、「移民の統合という試練に取り組み続ける」[Khalid Koser, 2016, *International Migration*] うえで、有用な参照例となる。
- 3.5.2 ロシア、アジア、中東、米国を取り結ぶ軸の中で、テュルク系ムスリムであるタタール移民の帰属意識を解明することは、ディアスポラ研究の主な課題とされてきたユダヤ人、パレスチナ人、アルメニア人[ロビン・コーエン 2012『新版グローバル・ディアスポラ』] や、「日本列島を一つの拠点とした」在日コリアン、日系移民[野口道彦他 2009『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』] 等とは異なる、移民の「故郷」理解への新たな視角を示すものである。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：オーラルヒストリーは、社会学の分野で発展しつつ、歴史研究にも貢献し、特に人々の経験から歴史を捉えなおす際に真価を発揮する。それは、すでに完結した静態としての歴史ではなく、今を生きる人々と共にある経験としての歴史を理解する試みである。移民という視点を取り入れた本論文は、終戦までを扱う先行研究の傾向に表れているような、過去の出来事としてのタタール人研究にとどまらず、極めて現代的課題へと架橋しており、学際的な学問領域である人間科学にとって、複合的な研究成果による貢献が存在する。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。
- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された学術論文・業績は、以下の通りである。
- (1) Numata, Sayoko, 2013, Fieldwork Note on Tatar Migrants from the Far East to the USA: For Reviews of Islam Policy in Prewar and Wartime Japan, 『日本中東学会年報』28(2), 127-144. (査読有)
 - (2) 沼田彩誉子, 2019, 「極東生まれのタタール移民2世の移住経験—『テュルク・ムスリムの国』トルコへの適応過程における『経由地』極東の役割」『日本オーラル・ヒストリー研究』15: 163-188. (査読有)
- 5 結論
- 以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上